Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences) 2000, Vol. 47, 281 − 299.

青年期後期の親子間コミュニケーションの類型に関する事例研究

平　石　賢　二

問題と目的

青年－両親関係の特質に関するこれまでの研究は，①心理的離乳，分離や葛藤，反抗，脱理想化などの視点（Hollingworth, 1929; Freud, A., 1936; Blos,1967; Hoffman, 1984; Rice, Cole, & Lapsley, 1990）と，②青年－両親間の親密さ，愛着関係，結合性などの視点（Douvan & Adelson, 1966; Kenny, 1987; Kobak & Sceery, 1988; LeCroy, 1988; Prager, 1995）に大別することができる（Hill, 1980, 1986;久世・平石，1992;平石，1995)。前者は分離や独立，そしてそれに伴う葛藤などを強調し，後者は青年と両親間の結びつきの重要性を強調している。

このような研究の動向に対して，Grotevant と Cooper らによる一連の「個性化 individuation」に関する研究（Cooper, Grotevant, & Condon, 1982; Cooper, Grotevant, & Condon, 1983; Grotevant & Cooper, 1985, 1986）では，対立する上記の２つの特徴を統合する視点で研究を行っている。彼らの研究においては青年－両親間の分離的側面と結合的側面はどちらかが顕著に現れるのではなく，同時に生起していると仮定している。また，彼らは青年－両親関係の特質を両者の実験場面での言語的コミュニケーションの相互作用の観察を通して明らかにしている点に特徴がある。

Grotevant と Cooperらは，個性化を Table 1 に示される独自性（individuality）と結合性（connectedness）の２つの下位概念によって概念化している。また，さらに独自性は自己主張（self-assertion）と分離（separateness)，結合性は相互性（mutuality）と滲透性（permeability）の各々２つの下位概念を含んでいる。

そして，これらの独自性と結合性は，集団意思決定課題（家族相互作用課題）に取り組む青年とその両親の具体的な発言の機能を指標にして測定される。自己主張は，自分自身の視点を持ち，それをはっきりと伝えることの責任を自覚していることを意味している。また，分離は，自分と他の家族成員との間の見解の違いを述べる能力である。このように自分自身の感情や考えに対する責任を受け入れていくことや，自分の考えを直接伝え，他者と自己とを区別する能力は，情緒的成熟の指標とされている。

相互性は，他者の信念や感情に対する感受性を示し，それを尊重することである。滲透性は，他者の考えに対する応答性あるいは開放性でり，他者の考えを発展させるために承認や励ましを与えることである。このような相互性の側面は，家族における健康性にとって重要となる。

これらの４つの言語的機能は，Table 1 に示される合計14の行動的指標によって測定されるが，因子分析による因子的妥当性が確認されている。

Cooper, Grotevant, & Condon（1983）は，高校生とその両親を対象に研究を行い，アイデンティティ探求や役割取得能力の高い青年においては，結合性を中心とした会話のなかで個々の成員の独自な意見が表明されるが，逆にそれらの人格発達の指標において低い能力を示している青年の親子関係では意見の不一致（分離の側面）を避け，高い滲透性（結合性の側面）を表明することが明らかにされている。彼らは望ましい心理社会的発達を遂げている青年の親子関係においては，結合性の環境のなかで青年が自分自身の独自な見解（独自性）を発達させることを認められていると述べている。このあり方は，Ainsworth（1979）が良好な愛着関係を形成している幼児が愛着の対象との関係を心の安全基地としながら，外界を探索することができるようになると述べているのと同様の意味を持ち，結合性と独自性が共にバランスよく表明される関係は青年にとっての安全基地として機能し，青年の家庭外での世界の探求を可能にしているのだと考察している。

さらに，対人関係領域（友情とデート行動）におけるアイデンティティの探求で得点の高い女子青年は，家族に対して高い分離を表明し，両親はお互いに結合性を示さないという特徴があるが，男子青年の場合は対照的に

Table 1　個性化の概念的次元と行動的指標（Condon,Cooper,& Grotevant〔1984〕より作成）

Ⅰ．独自性（Individuality）

1．自己主張（self-assertion）：自分自身の見解とそれをはっきりと伝達する責任性を示す
　1）行為や場所の直接的な提案（suggests action or location directly）（.63）[a)]
2．分離（separateness）：自己と他者との違いを表明する
　1）行為のリクエスト（requests action）（.51）
　2）他者の考えに直接的に反対／チャレンジする
　　（disagrees／challenges other's idea directly）（.46）
　3）他者の考えに間接的に反対／チャレンジする
　　（disagrees／challenges other's idea indirectly）（.29）
　4）関係ないコメント（Irrelevant comment）（.33）

Ⅱ．結合性（Connectedness）

1．滲透性（permeability）：他者の見解に対する応答性
　1）受けとめ（acknowledgement）（.78）
　2）情報／確証のリクエスト（requests information／validation）（.72）
　3）他者の考えに対する同意／受け入れ／採り入れ
　　（agrees with／accepts／incorporates other's ideas）（.46）
　4）関連したコメント（relevant comment）（.39）
　5）行為のリクエストに応じる（.28）
　　（complies with request for action）
2．相互性（mutuality）：他者の見解に対する感受性と敬意を示す
　1）行為や場所の間接的な提案（suggests action or location indirectly）（.92）
　2）歩み寄りの開始（initiates compromise）（.41）
　3）他者の感情を述べる（states other's feeling／mindreads, dictates feeling）（.32）
　4）情報／確証のリクエストへの回答
　　（answers request for information／validation）（.30）

注 a）括弧内の数値は因子負荷量

結合性が重要となり，特に父親と息子との間で相互的な結合性が示されているという性差も見いだされている（Cooper & Grotevant, 1987）。この女子青年における分離の表明の意味は，伝統的性役割観の限界に打ち勝とうとする姿勢であり，独自のアイデンティティを探求する上で必要なものではないかと考察されている。

以上のようなGrotevantとCooperらの研究は青年－両親関係における独自性と結合性を単一次元でとらえるのではなく，独立した2つの次元の両方が青年の人格発達には重要であることを示唆している。

しかしながら，青年期の親子関係の発達プロセスに関する諸研究は，青年－両親間の分離が特徴的である時期と結合や親密さが特徴的である時期とがあると主張している。例えば，Pipp, Shaver, Jennings, Lamborn, & Fischer（1985）は，描画法によって青年の認知している親子関係をとらえているが，そこでは分離に始まり葛藤や離反を経て，再び親密な結びつきを取り戻すプロセスが描かれている。また，White, Speisman, & Costos（1983）は，青年期から初期成人期までの青年と両親との関係を主に六段階の発達的プロセスとして分類している。これらには青年が両親から分離した自己を主張する段階（Whiteらはこの段階を個性化〔individuation〕と呼ぶ）から，両親との関係に再び目を向け，両親の視点を獲得し，やがて仲間のような相互的な関係（相互性〔mutuality〕）を形成する段階までが含まれている。

さらに，わが国における青年－両親関係の発達プロセスを扱った研究には，西平（1990）や落合ら（落合，1995; 落合・佐藤，1996）の心理的離乳過程に関する独自のモデルがあるが，これらのモデルにおいても青年期前期から中期にかけては分離・独立が，青年期後期においては新たな形での親子の結びつきが示されている。

そのため青年－両親関係の発達過程を考慮すれば，GrotevantとCooperが対象とした高校生年代以外の青年－両親関係の個性化のあり方は必ずしも彼らが示したものと一致するとは限らないと考えられる。

このような問題意識から，平石・久世・大野・長峰（1999）は，Grotevant と Cooper らの提唱した個性化モデルの概念的枠組みと測定法がわが国の大学生とその両親との関係に適用できるか試みている。その結果，主成分分析による概念的枠組みの検討では，自己主張と相互性が独立した因子ではなく融合した成分として抽出されたこと，また，親子間の発言内容の比較では，大学生の子どもが親に対して多くの滲透性（結合性）を表す発言をしていたことが，Grotevant らの先行研究とは異なった結果であることを示している。そして，これらの結果の違いには青年の年齢差だけではなく文化差が背景にある可能性も指摘された。

また，平石（2000）では，個性化のあり方がその後の青年の人格的特徴と関連するか否かを検討するために，個性化測定後二度にわたる追跡調査を行い，青年のアイデンティティと対人意識について測定した。その結果，男子大学生の親子間コミュニケーションにおいては，母親から息子への分離と父親から息子への滲透性が息子の対人意識やアイデンティティとネガティブな方向に相関関係にあるが，息子から母親への分離はアイデンティティと，父親から息子への分離は対人意識とポジティブな方向に相関関係にあることが示された。さらに，女子大学生においては，娘から父親への滲透性は娘の対人意識，アイデンティティとポジティブな方向に相関関係にあるが，父娘間の分離の表明は娘の対人意識やアイデンティティとネガティブな方向に相関関係にあり，母から娘への滲透性も同様に対人意識の状態とネガティブな方向に相関関係にあることが示された。上述のように Grotevant らの先行研究の知見においては，アイデンティティ探求の得点の高い女子青年は親に対して分離と滲透性の両方を表明することが挙げられているが，平石（2000）では分離の表明ではなく，滲透性の表明のみが適応的な人格特徴と関連していることが示された。

以上の結果に基づき，平石（2000）は青年の健康な人格発達を支える望ましい個性化の関係，すなわち独自性と結合性のバランスのあり方は，①関連する人格特徴の内容，②年齢（発達段階），③性，④役割期待と背景にある文化的価値などの要因によって異なる可能性を指摘した。この点については，Grotevant & Cooper（1998）も文化的経済的背景，年齢差などについて言及している。

ところで，Grotevant & Cooper らの一連の研究や平石・久世・大野・長峰（1999）および平石（2000）では親子間コミュニケーションのあり方を個人レベルか二者関係のレベルでとらえてきた。家族相互作用課題において観察される親子間の言語的コミュニケーションは，両者がそれまでに形成し繰り返し展開させてきた関係の特徴を再現したものであると考えられる。その行動の背景には各々の成員の他の成員に対する態度が規定要因として存在する。例えば，子どもの親に向けての発言は子どもがそれまでに形成させてきた親に対する態度（認知的，感情的成分を含む）を反映したものである。しかし，観察される具体的なコミュニケーション行動は，個人内の態度のみによって規定されるわけではない。その場で表された言葉は互いの言葉を相互に規定し拘束しあうものである。また，集団意思決定課題における発言はその成員間の役割構造や勢力構造，情緒構造なども表していると考えられる（佐藤，1986）。このような家族成員間の心理的関係の構造を把握するためには二者関係だけを切り取るだけでは不十分であり，全体としての家族（family as a whole）の特徴として分析を行う必要がある。

Turner（1970）は家族の意思決定のプロセスを観察し，そのパターンを①合意型，②妥協型，③事後型の3つに類型化している。また，Minuchin（1974）や Bowen（1976）は，家族をひとつの有機的なまとまりとして考え，家族のシステムの構造や機能を重視している。そして，このような家族システムの考えはその後の多くの家族療法に共通する視点となっており，膨大な臨床心理学的研究が行われている（亀口，1997）。青年－両親間の三者関係の構造を全体としてとらえるためには，このような類型論的な視点が有効ではないかと考えられる。しかし，この家族システムの視点は家族療法や家族心理学の分野では浸透して久しいにもかかわらず，青年心理学においては未だ十分に導入されていない。また，Grotevant（1998）自身も二者関係を超えた関係の視点を持つことが重要であることを示唆している。

平石（1999）ではこのような視点から，平石・久世・大野・長峰（1999）で得られた結果に基づいて，各家族成員のコミュニケーション変数（自己表明・滲透性・分離の3変数，Appendix 1を参照）を個人の変数としてではなく，家族の変数としてみなし，第二次の主成分分析およびクラスター分析を行い，家族の分類を試みた。第二次主成分分析の結果では，「家族分離性：親子における分離性表出」，「父親主導性：父親が主に提案や意見を述べて意思決定を進めていく関係」，「青年主導性：青年のリードで意思決定が進められていく関係」の3つの成分が抽出された（Appendix 2を参照）。また，クラスター分析の結果では4つのクラスターが確認された。4つのクラスターは，家族分離性得点の高低により2群に分かれるが，分離性の低い群では「A. 母親の滲透性の高さ（父親の自己表明と青年の滲透性の低さ）」と

「B. 父親の自己表明と青年の滲透性の高さ（母親の滲透性と青年の自己表明の低さ）」を特徴とする親子関係のタイプが示された。また，分離性の高い群では，「C. 母親の自己表明と青年の滲透性の高さ（父親の滲透性と青年の自己表明の低さ）」と「D. 父親の滲透性と青年の自己表明の高さ（母親の自己表明と青年の滲透性の低さ）」を特徴とする親子関係のタイプが示された。これらの結果から親子の三者関係の類型的構造が示され，また三者間の相互依存的関係や役割構造について検討する必要性が示唆された。

しかしながら，これらの結果からは親子間のコミュニケーション構造についての検討は行われたが，それらの関係が青年の人格発達に対する社会的文脈としてどのような機能を果たしているのかいう点については検討されていない。また，平石（1999）では青年の性別を考慮しないままクラスター分析を行っているが，同一のクラスターが示している三者関係の構造は，男子にとっても女子にとっても同様の意味を持つのかという点についても検討する必要がある。

そこで本研究では，各クラスターに属する青年がどのような人格発達的特徴を有するのか，クラスター間の差およびクラスター内における差（性差を含め）について事例をとりあげながら探索的に検討していくことを目的とする。

方　法[1)]

1．親子間コミュニケーションの測定と類型化の手続き

1）被験者

国立大学2，3年生30名（男女各15名）およびその両親60名。個別に研究協力を依頼し，青年及び両親の同意が得られた家族を対象にした。調査時の大学生の平均年齢は20歳5ヶ月（レンジ：19歳3ヶ月～23歳4ヶ月）であった。所属する学部の内訳は，文学（または人文学）部5名，教育学部13名，工学部7名，農学部1名，医学部1名，理学部3名である。

また，父親の平均年齢は50歳8ヶ月（レンジ：44歳7ヶ月～59歳2ヶ月）であり，母親の平均年齢は47歳9ヶ月（レンジ：43歳～54歳11ヶ月）であった。両親の職業の内訳は，父親では会社員12名，自営業6名，教員5名，公務員3名，医師・消防士・公団職員・自動車学校教官各1名，母親では自営業・専業主婦各8名，パートタイム7名，会社員3名，教員・塾講師・栄養士・保険業各1名であった。

2）実施時期および実施課題

実施時期：1994年2月～8月

実施課題と実施方法：

Condon, Cooper, & Grotevant（1984）によって開発された家族相互作用課題を実施した。課題は親子の日常的な相互作用に近づけるように被験者の自宅へ訪問し，被験者の用意した場所で実施した。

家族相互作用課題とは「無制限の資金を仮定して三名で1週間の家族旅行の計画を立てる」という集団意思決定課題である。この課題は成員が平等に発言権を持つことのできるように設定され，個々人の発言がもつ機能の特徴が分析できるように図られている。

課題に取り組む時間は，20分とし，記録用紙，メモ用紙および参考資料として世界地図・日本地図1冊を与えた。また，時間の目安としてストップウォッチ1個を与え，終了5分前に実験者が経過時間を告げた。

課題に取り組む様子は，テープレコーダー1台および8mmビデオカメラ1台で記録した。なお，実験者は実験開始後に退室し，終了5分前に時間を告げた以外は同席していない。[2)]

3）分析手続き－評定の手続き

日本語版評定マニュアルの作成：Condonら（1984）による評定マニュアルを日本語訳し，それを一部簡潔化しながら英語にはない日本語の表現に関する追加事項を付記した（平石，1998）。

逐語記録の作成：まずはじめにテープレコーダーと8mmビデオによって記録された20分間，3名分の発話内容を発言者別に逐語記録として転記した。

評定基準：記録された各々の発言は，Table 2に示される「動議機能」「応答機能」「その他の機能」の3種類の機能の領域にわたる合計16のカテゴリーを表す発言として評定した。特に動議機能と応答機能は主要な機能であり，すべての発言は必ずこの2つの領域の機能について評定することになっており，明白な機能を示さない場合には，「不明確な動議（または応答）機能」として評定する。これは意思決定のための発言の連鎖は決定を進

1）本研究で用いられたデータは，平石（平石・久世・大野・長峰，1999; 平石，1999; 平石，2000）による一連の研究で用いられたものと同一のものである。

2）Condon, Cooper, & Grotevant（1984）では計画を立てる家族旅行の期間は2週間であったが，日本人の一般的な旅行期間としては長いと判断し1週間とした。また，彼らの研究ではテープレコーダーのみにより観察記録がとられているが，本研究においては発言者と発言が向けられている対象を同定しやすくするために8mmビデオカメラを併用した。

Table 2　家族相互作用課題におけるコミュニケーション行動の機能とコード化のカテゴリー
(Condon, Cooper, & Grotevant〔1984〕より作成)

Ⅰ．動議機能（Move Functions）
1．関係ないコメント
例：もっと紅茶がほしいな。　お気に入りのテレビを見損なったよ。
2．行為や場所の直接的な提案
例：私はイタリアに行きたい。
3．行為や場所の間接的な提案
例：カナダへ行きましょう。　イタリアに戻りたくないですか？
4．情報／確証のリクエスト
例：それはどんな点で？　ローマからアテネまではどのくらい離れているの？
5．行為のリクエスト
例：そこにこれを書いて。　ちょっと待って。　みんなで投票しよう。
6．不明確な動議機能

Ⅱ．応答機能（Response Functions）
1．歩み寄りの開始
例：お母さんが骨董品屋に行っている間，私は散歩している。
2．他者の考えに対する同意／受け入れ／採り入れ
例：私もそこに行きたい。　いいよ，そこで。
3．他者の考えに直接的に反対／チャレンジする
例：私は列車には乗りたくない。　いやだな。
4．他者の考えに間接的に反対／チャレンジする
例：そこに行くには時間がないよ。　どうしてそこへ行きたいの？
5．情報／確証のリクエストへの回答
例：大体、400マイルあるよ。
6．行為のリクエストに応じる
例：分かった。　すぐにそこに書くよ。
7．受けとめ
例：あなたはカナダへ行くと言ったね。　ああ。
8．不明確な応答機能

Ⅲ．その他の機能（Other Functions）
1．関連したコメント
例：私たちには2週間と無制限の資金がある。　スペインはフランスの次だよ。
2．他者の感情を述べる
例：子どもたちはディズニーランドに行きたいでしょう。

めるための発言（動議機能）であると同時に前の発言に対する応答（機能）でもあるからである。「その他の機能」は必要に応じて付け加えられる機能である。

このようなコミュニケーション機能を表す発言の最小単位はチャンクと呼ばれるが，評定の際にはCondonら（1984）に従い，最初の300チャンク（3名分の合計）を評定の対象とした。評定は各チャンク毎に機能が決められ，そのチャンクの発言者と発言が向けられた相手を記号化して記録した。次に各機能毎に出現チャンク数をカウントし，発言者別に数値（頻数）を記録した。

評定の手順：評定は筆者と評定訓練を受けた教育心理学専攻の大学院生2名とで行なった。評定の手順としては，まず始めにすべてのデータを筆者が評定し，その後に訓練を受けた上述の評定者1名が再度評定結果のすべてを点検し，評定結果に対して意見の不一致が見られた場合には協議した上で最終決定をするという手順をとった。但し評定訓練に使用した2例だけは3名全員で独自に評定し結果を照合し協議を行いながら決定した。このような評定手順は，マニュアルの定義と一致した評定を可能にするための措置である。[3)]

3）評定の手続きおよび評定の信頼性に関する議論は，平石（2000）を参照されたい。

2．親子間コミュニケーションの類型化の方法

本研究において使用されているデータに基づいた親子間コミュニケーションの類型化は既に平石・久世・大野・長峰（1999）および平石（1999）によって報告された方法によってなされている。その分析手順は以下の通りである。

1）コミュニケーション行動間の相関と主成分構造

Cooper, Grotevant, & Condon（1983）および Grotevant & Cooper（1985, 1986）では，既に述べたようにTable 2に示されされた「不明確な動議または応答機能」をのぞく14カテゴリーが，因子分析の結果4つの因子によって構造化されていることを明らかにしている。平石・久世・大野・長峰（1999）では，この構造を確認するために青年と両親の90名のデータを元にして主成分分析（主成分解－バリマックス回転）を試み，「自己主張」「滲透性」「分離」と命名される3つの成分を抽出した。主成分分析の結果は，Appendix 1に示される通りである。

2）各家族成員の個性化得点（第一次成分得点）間の相関と主成分分析

続いて平石（1999）では，同データを元にして，各家族成員（父親・母親・青年）の個性化得点を自己主張・滲透性・分離の第一次成分得点（回帰法による）によって表した。そして，その第一次成分得点9変数間の相関係数を算出し，第二次主成分分析（主成分－バリマックス回転）を行った結果，3成分を抽出し，「家族分離性」「父親主導性」「青年主導性」と命名された。結果は，Appendix 2に示される通りである。

3）クラスター分析による家族の分類

さらに，平石（1999）では，第二次成分得点（回帰法

Table 3　各クラスター毎の同一性地位判別尺度および自己肯定意識尺度（対他者領域）の高得点者および低得点者

各クラスターのケース番号			現在の自己投入	将来の自己投入の希求	高・低得点者の合計回数	自己閉鎖性・人間不信	自己表明・対人的積極性	被評価意識・対人緊張	高・低得点者の合計回数
男子	A	M1	H	H	H2回	H	H	H	H3回
		M2	L	L	L2回		L	H	H1回・L1回
		M3	H	H	H2回	H		L	H1回・L1回
		M4	L		L1回	H			H1回
		M5	H	H	H2回		L		L1回
		M6	H	H	H2回	H	H		H2回
		M7		L	L1回	L		H	H1回・L2回
		M8	H		H1回		L	L	L2回
	B	M9		L	L1回		H	H	H2回
		M10	H	H	H2回	H		L	H1回・L1回
	C	M11	L	L	L2回	L	L	L	L3回
		M12				L	H	H	H2回・L1回
		M13	L	L	L2回	L	L		L2回
	D	M14		H	H1回		H	H	H2回
		M15	L	L	L2回	L	L	L	L3回
女子	A	F1	L	L	L2回	L	L		L2回
		F2	H		H1回	L		L	L2回
		F3	H		H1回	H		H	H2回
	B	F4	L		L1回	L		L	L2回
		F5	H	H	H2回		H	H	H2回
		F6	H	H	H2回	H	H	L	H2回・L1回
		F7		L	L1回				
		F8		H	H1回	H	H	H	H3回
		F9	L	H	H1回・L1回	H	H	H	H3回
	C	F10	L	L	L2回	L	L		L2回
		F11		L	L1回		L	H	H1回・L1回
		F12	H	H	H2回	H	H		H2回
		F13					L	H	H1回・L1回
	D	F14	L	L	L2回		L	L	L2回
		F15	L		L1回	L		L	L2回

注　表中の記号Hは各尺度得点が肯定的な方向で男女別に上位5位以内に入り，Lは下位5位以内に入っていることを示す。
但し，2名が同順で5位の場合には6名が入っている。

による）を算出し，それを各家族のコミュニケーションの特徴を示す変数として扱った。そして，これら3つの変数に基づいたクラスター分析を試みることにより，家族を分類し，その結果から親子間コミュニケーションのあり方を類型論的視点から検討することにした。クラスター分析の方法は3変数の値に基づいたケース間のユークリッド距離を算出し，最遠隣法によって行う階層クラスター分析である。そして結果として4つのクラスターを想定することができた。各クラスターの特徴については既に「問題と目的」で述べた通りである。各クラスターの人数の内訳は，Table 3に示される通り，クラスターAは11名（男子8名・女子3名），クラスターBは8名（男子2名・女子6名），クラスターCは7名（男子3名・女子4名），クラスターCは4名（男子2名・女子2名）である。

3．青年のアイデンティティおよび対人意識の測定

1）調査対象および実施時期

上記の家族相互作用課題を実施した後，時間的間隔をあけて2回の質問紙調査を同一対象である青年に実施し，青年のアイデンティティおよび対人意識を測定した。

第1回目の調査は，1995年7月～9月に実施し，家族相互作用課題の実施との時間的間隔は1年～1年5ヶ月であった。実施は国立N大学の実験室で個別に行った。

第2回目の調査は，さらに同一対象に対して同一内容の質問紙調査を郵送調査により行った。実施時期は，1996年3月であり，家族相互作用課題の実施との時間的間隔は1年7ヶ月～2年の範囲にわたっている。

2）測定用具および内容

アイデンティティの測定：同一性地位判別尺度（加藤，1983）をアイデンティティ測定用具として使用。「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入の希求」の3つの下位尺度各4項目（合計12項目）から構成。各項目に対して「現在の自分自身にとってどのくらいあてはまるか」を考えさせ「まったくそのとおりだ」から「全然そうでない」までの6件法（1－6点を配点）によって測定する。尺度得点は4項目の合計得点（得点範囲4～24点）である。ただし，本研究においては3つの下位尺度のうちMarcia（1966）の言うコミットメントに相当する「現在の自己投入」とGrotevant & Cooper（1985, 1986）の扱ったアイデンティティ探求に相当する「将来の自己投入の希求」の2尺度のみを分析の対象にした。2尺度の項目例は以下の通りである。

「現在の自己投入」尺度：「私は今，自分の目標をなしとげるために努力している」「私は，自分がどんな人間で何を望み，行おうとしているのかを知っている」等。

「将来の自己投入の希求」尺度：「私は一生けんめいうちこめるものを積極的に探し求めている」「私は，自分がどういう人間であり，何をしようとしているのかを，今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている」等。

対人意識の測定：自己肯定意識尺度（対他者領域）を使用した。これは，心理学的健康の指標として平石（1990, 1993）により作成された尺度の一部である。本研究では対人意識の健康性を測定する尺度として使用した。3下位尺度合計22項目から構成。各項目に対して「現在の自分自身にとってどのくらいあてはまるか」を考えさせ「あてはまる」から「あてはまらない」までの5件法（1－5点を配点）によって測定する。尺度得点は各下位尺度項目の合計得点である。項目内容と項目数は以下の通りである。

「自己閉鎖性・人間不信」尺度：「他人との間に壁をつくっている」「友だちと一緒にいてもどこかさびしく悲しい」「私は人を信用していない」等8項目（得点範囲8～40点）

「自己表明・対人的積極性」：「自主的に友人に話しかけていく」「相手に気を配りながらも自分の言いたいことを言うことができる」「人前でもこだわりなく自由に感じたままを言うことができる」等7項目（得点範囲7～35点）。

「被評価意識・対人緊張」尺度：「人に気をつかいすぎてつかれる」「自分は他人よりおとっているかすぐれているかを気にしている」「無理して人に合わせようとしてきゅうくつな思いをしている」等7項目（得点範囲7～35点）

結　果

1．各クラスターにおけるアイデンティティおよび対人意識の特徴

30組の家族の家族コミュニケーション変数の得点および青年の同一性地位判別尺度の得点（現在の自己投入および将来の自己投入の希求の第1回調査と第2回調査の平均値），自己肯定意識尺度の得点（自己閉鎖性・人間不信，自己表明・対人的積極性および被評価意識・対人緊張の第1回調査と第2回調査の平均値）はAppendix 3に示される通りである。

各クラスターに分類された青年のアイデンティティおよび対人意識の特徴を把握するために，同一性地位判別尺度および自己肯定意識尺度の高得点者と低得点者がどのクラスターに多く見られるかを検討した。両尺度の得点は第1回調査と第2回調査の平均値で表し，男女別に

得点の上位5位までを高得点者，下位5位までを低得点者とみなした。但し，2名が同順で5位になっている場合には6名を入れた。また，自己閉鎖性・人間不信尺度と被評価意識・対人緊張尺度の得点の高さは不健康さの指標となるため，便宜上この2尺度に関しては得点が低い場合に高得点者とみなし，逆に得点が高い場合に低得点者とみなした。

結果は，Table 3に示す通りである。本研究においては被験者数が少ないため統計的検定は行っていないが，男子の場合，クラスターAに特に得点の高い者（例えば，M1とM6）がおり，逆にクラスターCとクラスターDに特に得点の低い者（例えば，M11，M13，そしてM15）がいる傾向が窺われる。

これに対し女子の場合には，クラスターBに特に得点の高い者（例えば，F5とF8）が多い傾向が窺われた。女子の低得点者は男子同様にクラスターCとクラスターDに多い傾向が窺われる。しかし，クラスターAのF1が低得点者であり，クラスターCのF12が高得点者であるなど，必ずしもクラスター間の差が顕著であるとは言えない。

以上の結果をまとめると，男女に共通するのは分離性得点の高いクラスターCとクラスターDにアイデンティティと対人意識の得点の低い者が多い傾向が見られることであり，その他の点に関しては性差がある可能性がうかがわれた。

2．男子におけるアイデンティティおよび対人意識の高・低得点者の家族コミュニケーションに関する特徴

次に男子の中でアイデンティティおよび対人意識の得点の高い者と低い者の家族コミュニケーションについて検討することにする。男子の高得点者は，Fig. 1に示されるM1とM6の2名を取りあげた。両者はいずれもクラスターAに分類された者である。しかし，この両者のプロフィールを見ても分かるように両者はかなり異なったパターンを示しており，クラスターAとしてのまとまりは，家族分離性の得点が中程度であるという特徴によるものであろう。

M1の家族コミュニケーションの特徴は，両親が共に適度な高さの滲透性と分離を示している点，父親が最も多くの自己表明を示し，続いて子ども，母親の順に自己表明の得点が低くなっている点，子どもの分離は特に低く，滲透性もあまり示さない点などが挙げられる。

また，M6の特徴は，父親の自己表明がかなり低く，母親の滲透性が高い。また，自己表明は子どもと母親によって示され，子どもは分離もやや高く示している点などが挙げられる。

要約すると，M1の家族は父親がリードし，子どもがそれに続く形で議論が展開していくが，M6では子どもがリードしながら母親と共に議論を進めていく形であると考えられる。

他方，低得点者については，M11，M13，M15の3名を取りあげた。この三者の共通点は，分離得点のパターンであると考えられる。すなわちいずれの親子においても父親の分離得点は中程度であるが母親の分離得点が高いのが特徴である。

M11の特徴は母親が相対的に高い自己表明を示し父親と息子がそれに続いて自己表明を示す。滲透性についても母親が最も多く息子がそれに続いている。父親の滲透性は低い。さらに母親は分離得点も高く息子がそれに続いてやや高い分離を示している。つまり，この家族においては母親がいずれの面においても発言量が多くリードし，他のメンバーの発言も受けてはいるが反対意見も多く表明している。相対的に見れば父親が後ろに引いているようである。

次にM13の特徴は，全体的に自己表明の得点が低いが三者のなかでは父親が最も高く青年が最も低い。逆に滲透性については青年が最も高い得点を示し父親は滲透性が低い。母親は自己表明も滲透性も中程度かやや低い得点であるが，高い分離を示している。つまり，M13の家族は父親がリードし息子が受けとめながら議論を進めていくが母親が反対意見を多く示すという関係である。

最後にM15の特徴は，息子が最も多く自己表明を示しそれに父親，母親の順に続いている。また，滲透性は父親が最も高い得点を示し，母親がそれに続くが息子の滲透性はかなり低い得点となっている。そして，分離については母親がかなり高い得点を示し，息子がそれに続いている。父親の分離は中程度である。この関係を要約すると，息子のリードと父親の受けとめを中心に議論が進むが，母親が多くの反対意見を示し，息子の反対意見もやや多いと言える。

以上の男子に関する結果を要約すれば，男子では，青年のアイデンティティや対人意識でネガティブな回答を示している親子では親子間コミュニケーションにおいて母親が分離を多く示していた。しかし，それらの人格発達の特徴においてポジティブな回答を示す青年の親子の共通する特徴は家族分離性が高くないという以外には見いだせなかった。健康な親子関係の特徴という観点からは，例えば，両親が適度に滲透性や分離を示す関係，親と息子が共に議論をリードしながら進めていける関係など，望ましい関係のあり方も複数存在しうるのではないかと考えられる。

3．女子におけるアイデンティティおよび対人意識の高・低得点者の家族コミュニケーションに関する特徴

女子のアイデンティティおよび対人意識の高得点者については，Fig. 3に示されるＦ5，Ｆ8とＦ12の３名を取りあげた。

Ｆ5とＦ8はクラスターＢに分類された者であり，第二次成分得点のプロフィールは似通っている。すなわち，家族分離性が低く，父親主導性が高い。そして，青年主導性が中程度かそれよりもやや低いというものである。

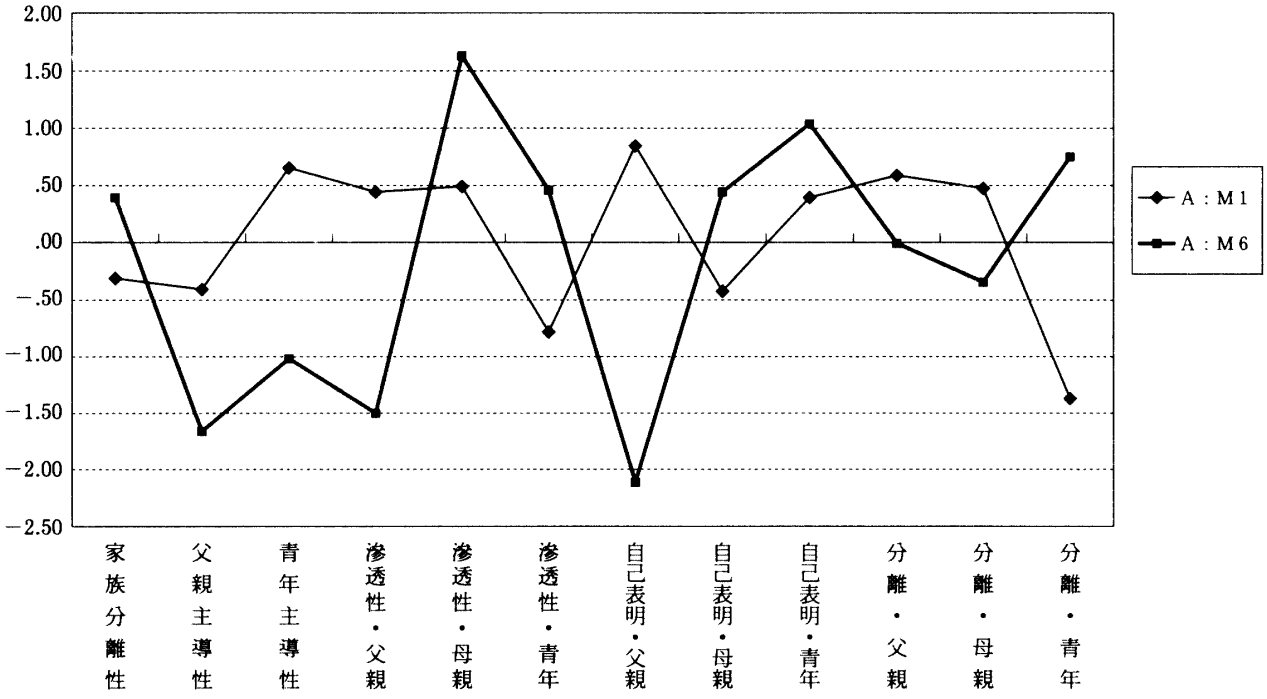

Fig. 1　男子の高得点者の親子間コミュニケーション得点のプロフィール

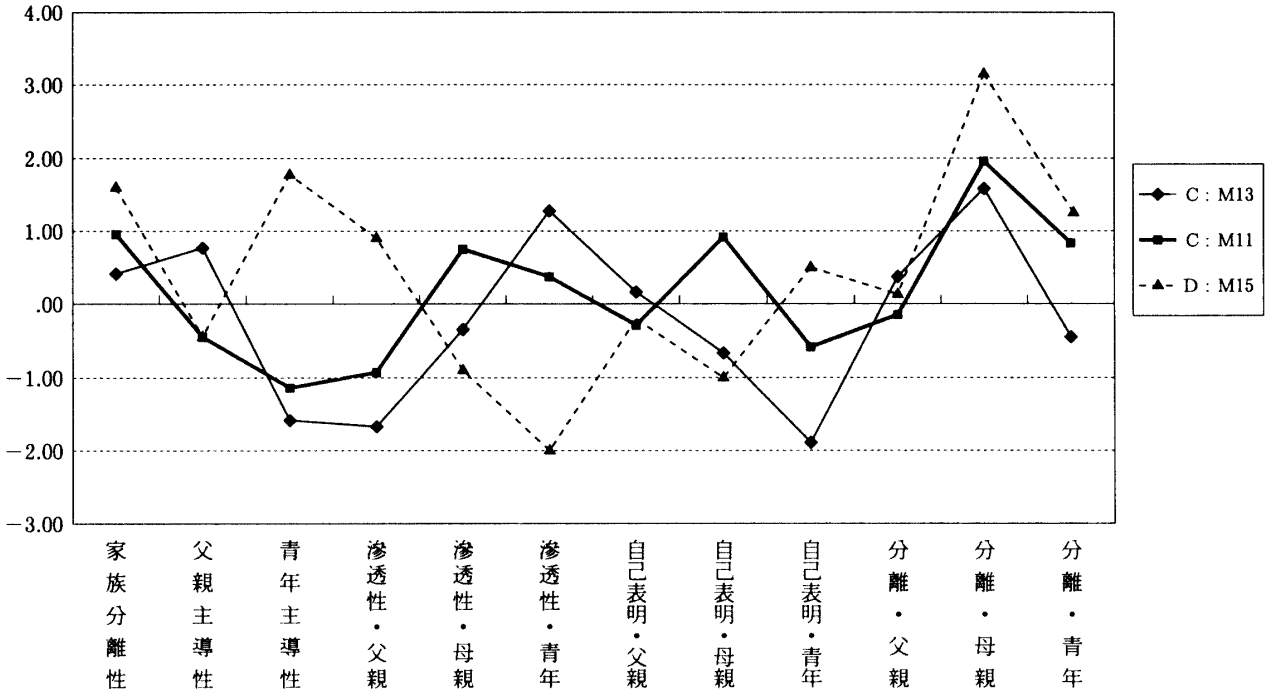

Fig. 2　男子の低得点者の親子間コミュニケーション得点のプロフィール

この特徴はクラスターＢの全体的な特徴として述べられたものでもある。ただし，第一次成分得点のプロフィールパターンには若干差が見られる。例えば，娘の滲透性はＦ５とＦ８のいずれにおいても高い得点を示すが，親の滲透性については，父母で差が見られる点，自己表明については Ｆ５は三者が全体として高く特に父親の得点がＦ８に比べて差が大きい点などである。つまり，Ｆ５の親子の方が父親のリードがより顕著であり，Ｆ８は逆に母親のリードが見られる。

他方で，Ｆ12はクラスターＣに分類され，全く異なっ

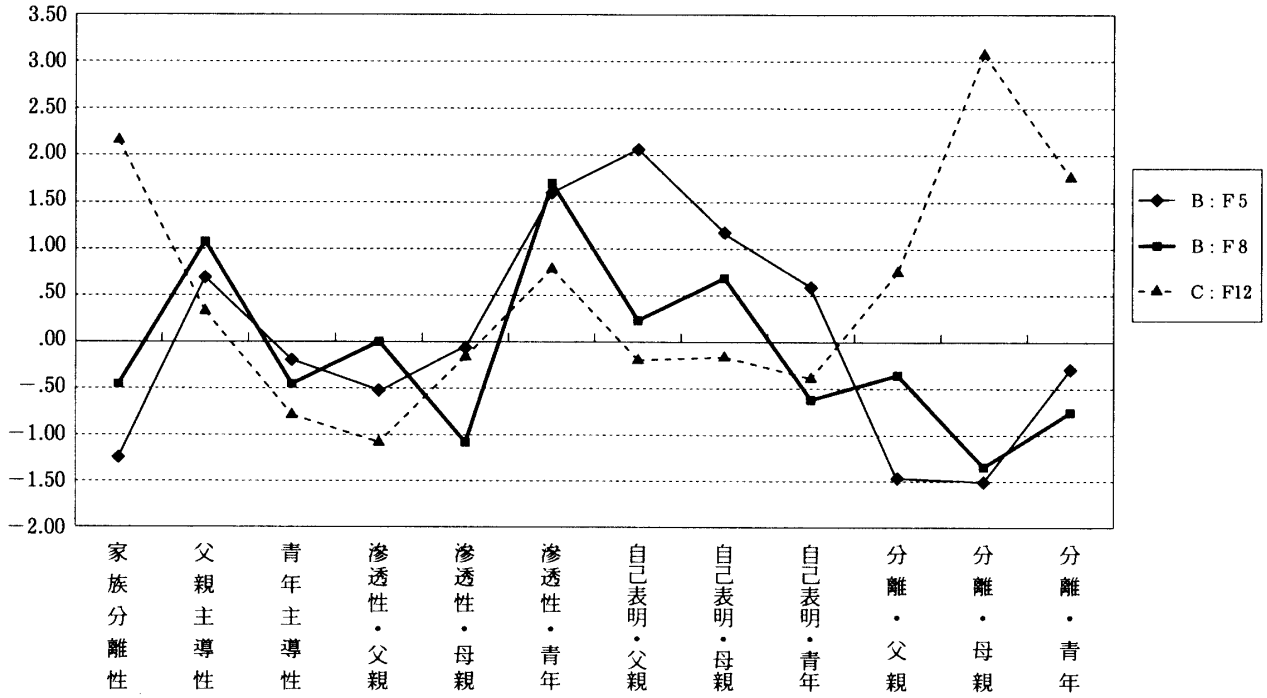

Fig. 3　女子の高得点者の親子間コミュニケーション得点のプロフィール

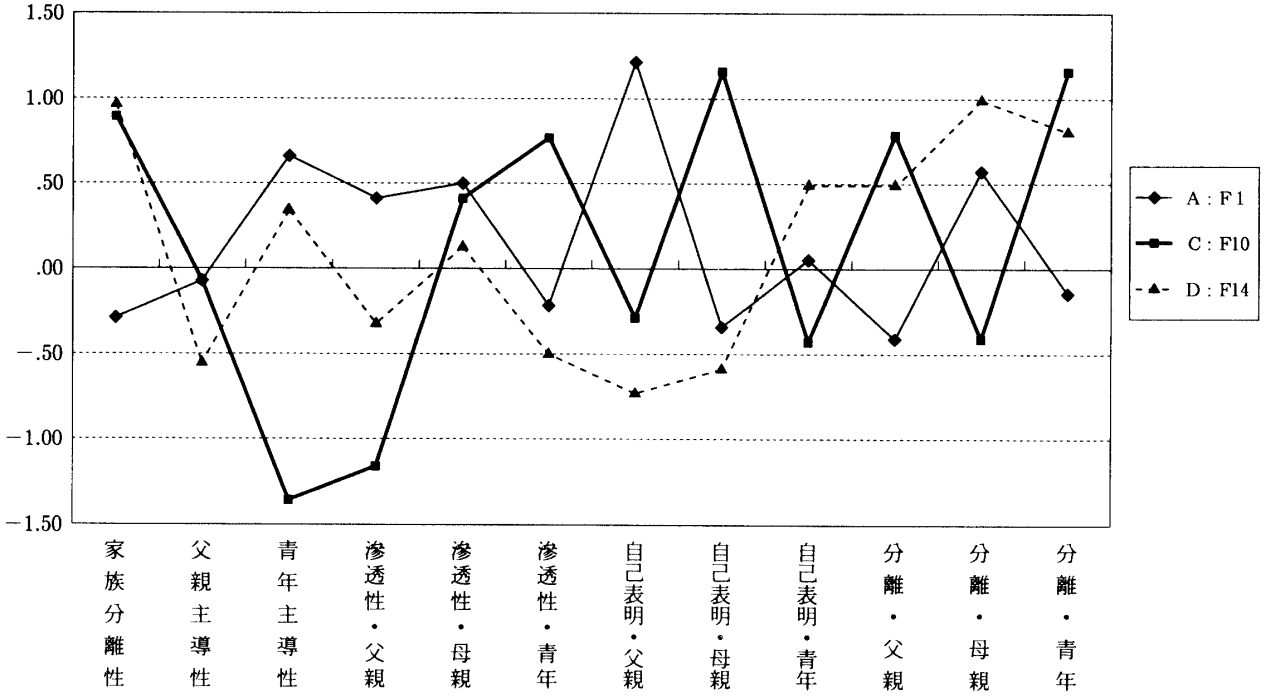

Fig. 4　女子の低得点者の親子間コミュニケーション得点のプロフィール

たプロフィールを示している。最も顕著な特徴は家族分離性得点が著しく高く，中でも母親のそれは極端に高い。相互性に関しては三者がいずれも均等に中程度の発言量を示し，滲透性については，娘が高い得点を示し，母親が中程度，父親が低い得点を示している。

続いて，女子のアイデンティティおよび対人意識の低得点者として，Fig. 4 に示されるF1，F10，F14の3名を取りあげた。三者はいずれも異なるクラスターに分類されており，プロフィールも一見して異なっていることが分かる。

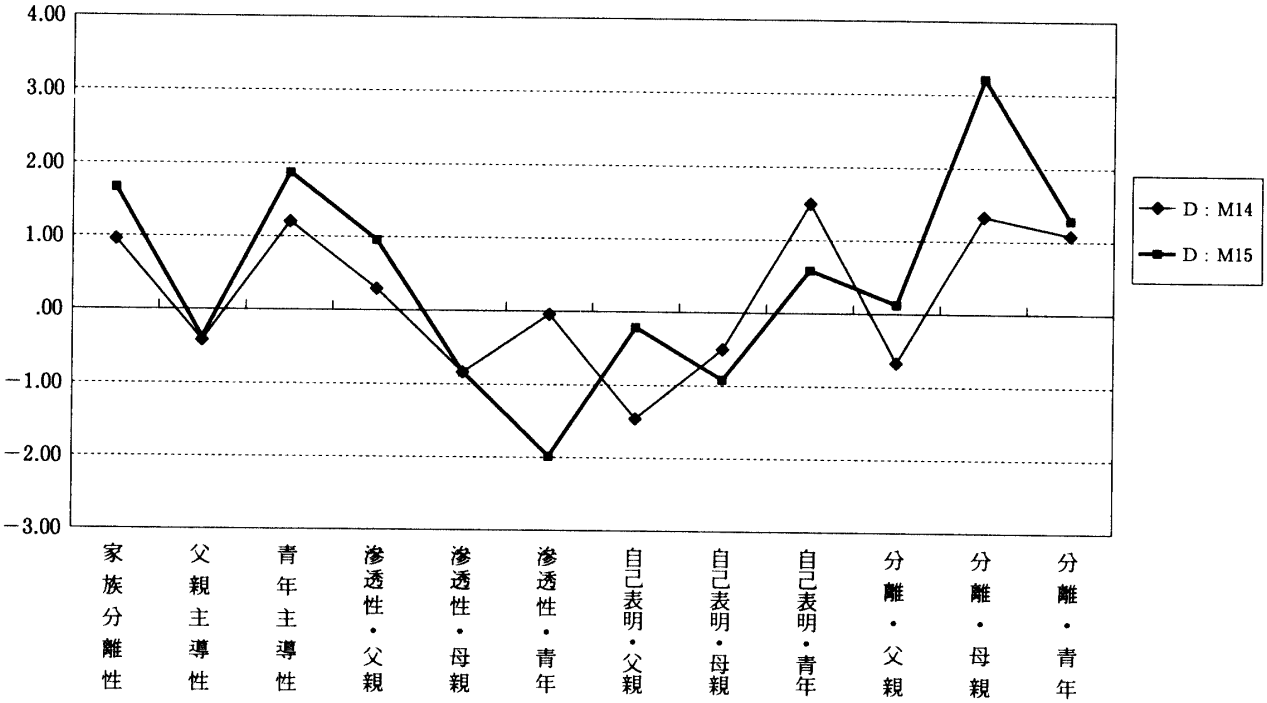

Fig. 5　男子における同一クラスター内の高・低得点者の比較

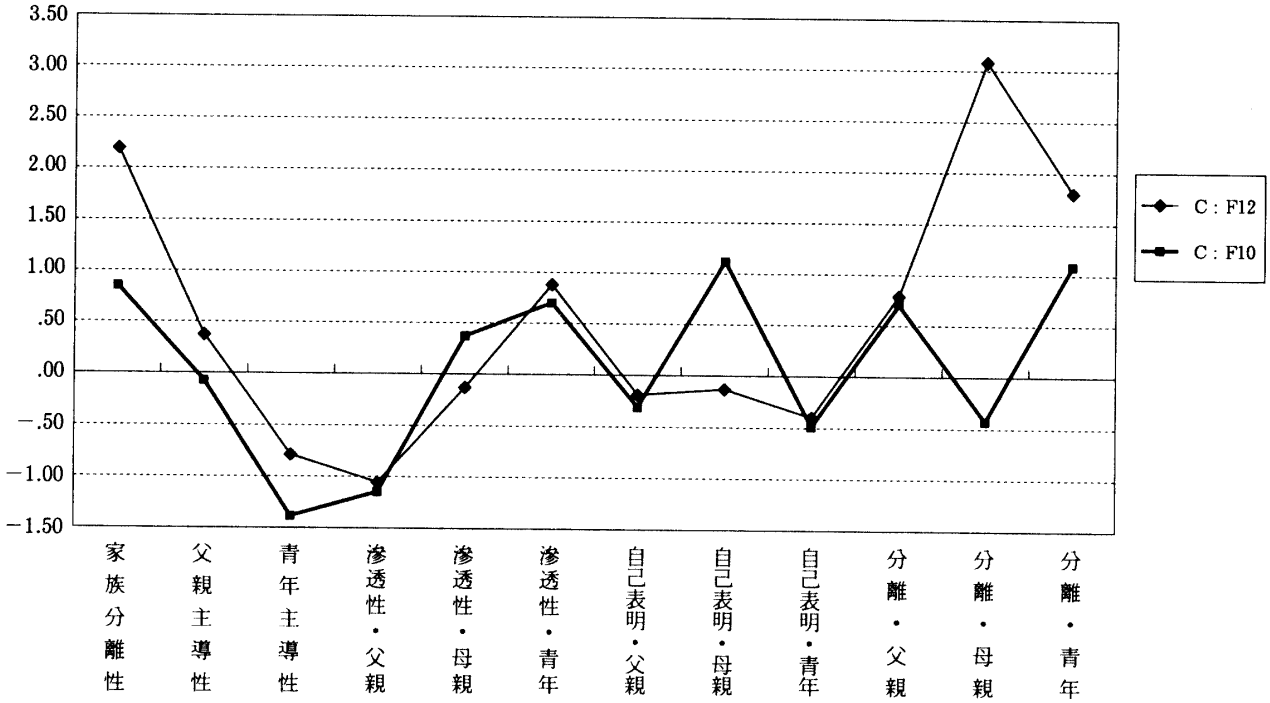

Fig. 6　女子における同一クラスター内の高・低得点者の比較

F1の特徴は父親が三者のなかで最も高い自己表明を示し，滲透性については両親が同程度にやや高い。そして，母親が分離をやや多く示す傾向がある。つまり，父親が多くの提案や関連したコメント，受けとめるような発言を多くするものの娘があまり自分の意見を述べられていないように見える。

F10の特徴は，母親の自己表明が最も高く，父と娘は中程度に示す。また，滲透性は娘が多く表し次に母親が続くが，父親の滲透性は低い。さらに，分離については，娘が最も高く次いで父親がやや高い。つまり，母親のリードで議論が進み娘が受けとめてはいるものの娘は反対意見も多く，また，父親の発言のなかでは反対意見が際だっている。

F14の特徴は，F10と同様に家族分離性が高いが，分離を表明するのは三者がある程度均等に高い得点を示している点で異なっている。また，自己表明については娘の得点が高く両親のそれはやや低い。そして滲透性の担い手は母親が最も高い点を示すが中程度である。

以上の女子に関する結果を要約すれば，女子では，アイデンティティや対人意識でポジティブな回答を示している者は，親の自己表明に対して娘が滲透性を高く示し，家族分離性は高くないという親子間コミュニケーションの特徴が見られた。しかし，母親や娘が非常に高い分離を示しつつも娘の人格的特徴についてポジティブな回答が得られている者もおり，男子同様に決まったパターンだけが存在する訳ではないことが示唆された。他方，娘の人格特徴についてネガティブな回答を示した事例においては，あまり共通点が認められずコミュニケーションパターンも多様であることが窺えた。

4．同一クラスター内の事例の比較

これまでは，アイデンティティおよび対人意識の高・低得点者を男女別に取りあげ，彼らの家族コミュニケーションの特徴を検討してきた。しかし，高得点者同士あるいは低得点者同士のプロフィールを比較した場合，共通した特徴以上に異なったパターンも多く見られた。そこでここでは，さらに進めて，同一クラスターに分類されながら，アイデンティティと対人意識の得点に差が認められる組み合わせを検討することで，両者を分ける大きな違いは何なのか検討することにした。

まず始めは男子における同一クラスター内の比較である。男子ではクラスターDにおいて，M14とM15がそれぞれ高得点者と低得点者に位置づけることができた。Fig. 5に示されるように，両者の第二次成分得点のプロフィールパターンはよく似ている。両者の間で得点差が見られるのは，息子の滲透性，父親の自己表明，母親の分離である。M15では息子は両親に対する応答性を示さず，母親は自己表明や滲透性よりも分離を最も多く表明している点にマイナス面を感じる。

続いて，女子の場合，クラスターCにおいてF10とF12がそれぞれ低得点者と高得点者に位置づけられた(Fig. 6を参照)。両者のプロフィールパターンはやはりよく似ているが，母親の相互性と分離が特に顕著な得点差を示している。これらは両家族における母親のポジションの違いを表している。F12の母親は自己表明も滲透性も中程度であるが，分離が著しく高い。母親がこの課題において体験した不満や葛藤は非常に高いものであったと推測される。しかし，娘の立場からすれば，親子三者が適度にバランス良く自己表明し，滲透性については自分が最も多く示し，なおかつ分離も多く表明できるという関係は親子のなかで伸び伸びと自分の意見を発言しつつ，親に対する応答性を十分に表現できるという望ましいあり方を表しているものと考えられる。

しかし他方で，F10では，三者の自己表明はアンバランスで母親が最も高い得点を示している。逆に分離については母親の得点は最も低く，父親と娘の分離はやや高いが，特に娘が最も高いという点が特徴的である。この場合，この課題での取り組みで不満を感じているのは娘である可能性が高い。

以上のように類似したコミュニケーションパターンを示していたとしても実際には三者のダイナミックスは大きく異なる可能性があることが分かる。

考　察

1．Grotevant と Cooper らの知見との比較－特に分離に関して

本研究では，Grotevant と Cooper らの Family Process Project によって開発された家族相互作用課題で観察された大学生とその両親の親子間コミュニケーションの類型と大学生のアイデンティティ，対人意識を関連づけながら，健康な人格発達の背景にある社会的文脈としての親子間コミュニケーションのあり方について事例的検討を行った。

アイデンティティと対人意識の高得点者（人格発達の特徴において肯定的な面が見られた者）と低得点者（人格発達の特徴において否定的な面が見られた者）の親子間コミュニケーションの類型的特徴を吟味したところ，男子の高得点者はクラスターAに多く，女子の高得点者はクラスターBに多く見られるという性差の傾向が示唆された。また，低得点者については男女ともにクラスターCまたはクラスターD，すなわち，家族分離性得点の高い家族に多い傾向が示唆された。しかし，本研

究においては被験者が少ない点，同一クラスター内に高得点者と低得点者が混在している点を考慮すると，この知見については今後より多くのデータに基づいた検証が必要である。

また，男女別に高得点者と低得点者の親子間コミュニケーションの個々のプロフィールについて比較検討したが，男女各々に共通する典型的なパターンは必ずしも見いだされなかった。

男子の低得点者の特徴としては，母親の分離得点の高さが指摘されたが，これは平石（2000）による相関分析の結果と一致するものである。しかし，高得点者２名については，全く異なったパターンを示していた。また，女子の場合，高得点者３名のうち２名は，父親主導性得点が高く，娘の滲透性得点が高いという共通点が見いだせた。この結果も平石（2000）によって示されたものと一致する。しかし，低得点者３名についてはあまり共通点が見いだされていない。

既に述べたように，Grotevant と Cooper らによる先行研究（Coope, Grotevant, & Condon, 1983; Grotevant & Cooper, 1985; Cooper & Grotevant, 1987）の結果によれば，アイデンティティ探求や役割取得能力の高い青年，特に女子青年にとっては，分離の表明が重要な特徴として示された。しかし，本研究においては男女共に家族分離性得点は青年のネガティブな人格特徴との関連が認められているという点で先行研究の知見を支持しない結果となった。但し，事例F12は，母娘の分離得点が高いにも関わらず娘のアイデンティティと対人意識が肯定的な方向で高い得点を示していた例外的な例である。この親子関係において，娘は高い分離を示しつつも両親と同程度の自己表明，そして，両親よりも多くの滲透性を表している。このような特徴を見るとこの親子関係における娘の分離の表明は不満や反発というよりもむしろ自由な自己表現という肯定的な意味づけが可能であり，Cooper, Grotevant, & Condon（1983）の描いたアイデンティティ探求の得点の高い健康な青年像に類似する事例であると考えることもできよう。

また，Cooper ら（1983）は個性化されていない関係を表している家族（Janet の家族）の事例を紹介し，その家族成員は自己主張や反対意見を避け，結合性を表す発言を頻繁に述べていたと説明し，Janet はアイデンティティ探求においても自己決定できない特徴が認められたとしている。本研究における事例では，事例Ｆ１においてこの Janet のあり方に近い特徴が認められた。Ｆ１の親子において，父親は自己表明が高く滲透性が低い。次に母親は自己表明はせずにやや高い滲透性と分離を表明する。そして，最後に娘は自己表明，滲透性，分離のいずれも中程度であり特徴が見られない。つまり，父親がどんどんリードしていき母親がそれを受け止めながらも反対意見も表明するが，娘はあまり目立った発言が見られないというパターンである。この親子関係においては，娘の自己抑制が強いという印象を受けた。以上のように Grotevant と Cooper らが記述した個性化された関係（あるいは個性化されていない関係）に類似する事例も幾つかは認められている。しかし，全体としては特に分離に関して一致しない結果が多いのではないかと思われる。この点について，平石（2000）は，発達差と文化差の観点から先行研究との被験者の背景の相違点について考察している。つまり，対象となっている大学生は青年期後期にあるため親子関係の発達において結びつきが再び重要となっていると考えられること（発達差），そして，和を重んじる日本文化においては自己主張や分離が欧米社会よりも否定的な意味を持ちやすい（文化差）などの解釈が試みられた。

さらにここで考えられる別の問題は，分離そのものの意味づけに関するものである。Hoffman（1984）は，分離（separation）を①認知的レベル（態度的独立：青年と両親との間の態度や価値，信念などに関する分化），②行動的レベル（機能的独立：両親の援助なしに個人的で実際的な問題を管理し，それに向かうことのできる能力），③情緒的レベル（感情的独立：両親からの承認，親密さ，一緒にいたい気持ち，感情的なサポートなどについての過度の欲求にとらわれていないこと；葛藤的独立：両親との関係のなかで過度の罪悪感，不安，不信，責任感，抑制，憤り，怒りの感情を抱いていないこと）に分類している。Grotevant らの開発した家族相互作用課題において観察される分離（他者の見解に対する直接的・間接的反対／チャレンジ，行為のリクエスト）は発言内容からコード化され頻数をカウントする方法によって測定されるが，この方法では Hoffman が示したような分離のレベルを区別することが困難であると考えられる。分離を表す発言は，自分と他の家族成員との見解の違いを述べる能力であると定義されているが，実際には他の家族成員に対する不満や怒り，反抗心などの感情が反対意見という形で表される場合もある。その場合，反対意見を表現できる能力，あるいは反対意見を受け入れる態度を他の成員が示すという肯定的な面だけではなく，否定的な面を含んでいることも十分に考えられる。つまり，発言数のみを指標にする方法では発言者の感情が十分にとらえることが困難なのである。

そのため，分離に関する研究知見の不一致に関しては，これらの測定論的問題を解決した上で議論する必要があるだろう。この問題に関しては今後の課題となるが，発

言の頻数のみを扱うことの測定論的問題に関しては，Grotevant と Cooper 自身による指摘（Grotevant & Cooper, 1998）もあり，Bengtson & Grotevant (1999) では Q ソート技法による測定が試みられている。

2．親子間コミュニケーションの典型的パターンと背景にある要因

続いて，本研究において青年の健康な人格特徴と関連する典型的な親子間コミュニケーションのパターンが得られなかったことに関して考察したい。

従来の親の養育態度や家族構造と機能に関する研究においては，健康な家族や望ましい親の在り方などが提示されてきた。例えば，Olson, Sprenkle, & Russell (1979) によって提唱された円環モデルでは，家族ダイナミックスを凝集性と適応性の 2 つの次元によって記述するが両次元共に中程度の適度なレベルを維持したバランスの良い家族が健康的な家族であると述べている。また，Johnson, Shulman, & Collins (1991) は，5 年生，8 年生，11年生の男女に両親の養育態度を尋ね，自尊感情や学校適応や学習成果などとの関連を検討しているが，結果として両親が一致して権威ある親，すなわち，適度なコントロールと暖かく受容的な雰囲気のなかで自律的な行動を容認し励ます態度を示している群が最も望ましい適応を示しており，父母が不一致を示している群は適応指標については低い得点を示していた。

これらの研究は望ましい親子関係のあり方についての典型を示している。しかし，Gjerde (1986) の研究が明らかにしているように，親子の三者関係において両親は互いに役割を分化させている可能性もある。佐藤 (1986) は家族システムにおいては，連合構造，勢力構造，役割構造などがあると述べている。この構造は各々の家族においてかなり異なった様相を呈するものと思われる。亀口 (1992) は，健康な家族システムの代表としては，均衡型型と呼ばれる親子の世代間の距離がわずかに大きいが全体として近すぎも遠すぎもない適度な心理的距離で結ばれた家族タイプを挙げているが，病理的な家族システムに関しては，父親孤立型，迂回攻撃型，迂回保護型，分裂型，世代断絶型，離散型そして密着型と様々な家族構造のタイプがあることを示している。

勢力構造や役割構造を考えるならば，親子の三者が民主的な関係を形成していることも望ましい形態のあり方であるが，特定の家族成員がリーダーシップを発揮し，それを他の家族成員が支持するという関係も家族成員間に合意が得られて不満が無い状況であれば，問題はないものと考えられる。つまり，青年の発達にとって望ましいあるいは望ましくないコミュニケーションパターンのあり方は複数あり得るのではないかと考えられる。

Lerner (1991) は，個人と社会的文脈との関係を理解する上では，特に適合の良さ（goodness of fit）が重要な要因になると考えている。先に述べたようにここで観察されている親子間のコミュニケーションの中では体験されている感情（満足感，葛藤，怒り，恐れ等）が十分に把握されない可能性がある。見かけ上類似したコミュニケーションパターンでも背景にある感情まで同一とは限らない。また，逆に見かけ上異なったコミュニケーションパターンの背景には Grotevant と Cooper らのコード化カテゴリーでは把握されない別の指標において共通点が見いだせるかもしれない。今後はこのような別の指標を探ることも課題になるだろう。

引用文献

Ainsworth, M.D.S. 1979 Infant-mother attachment. *American Psychologist,* **34**, 932-937.

Bengtson, P.L., & Grotevant, H.D. 1999 The individuality and connectedness Q-sort: A measure for assessing individuality and connectedness in dyadic relationships. *Personal Relationship,* **6**, 213-225.

Blos, P. 1967 The second individuation process of adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child,* **22**, 162-186.

Bowen, M. 1976 Theory in the practice of psychotherapy. In P.J. Guerin (Ed.), *Family therapy.* New York: Hoeber／Harper & Ross. Pp.337-388.

Condon, S.L., Cooper, C.R., & Grotevant, H.D. 1984 Manual for the analysis of family discourse. Psychological Document, Ms. No.2616

Cooper, C.R., & Grotevant, H.D. 1987 Gender issues in the interface of family experience and adolescents' friendship and dating identity. *Journal of Youth and Adolescence,* **16**, 247-264.

Cooper, C.R., Grotevant, H.D., & Condon, S.M. 1982 Methodological challenges of selectivity in family interaction: Assessing temporal patterns of individuation. *Journal of Marriage and the Family,* **44**, 749-754.

Cooper, C.R., Grotevant, H.D., & Condon, S.M. 1983 Individuality and connectedness in the

family as a context for adolescent identity formation and role-taking skill, In H.D. Grotevant & C.R. Cooper (Eds.), *Adolescent development in the family*, New Directions for Child Development, No.22. San Francisco: Jossey-Bass. Pp.61-76.

Douvan, E., & Adelson, J. 1966 *The Adolescent Experience*. New York: Wiley.

Freud, A. 1936 *The ego and the mechanisms of defense*. New York: International University Press.（フロイト A. 外林大作訳 1958 自我と防衛 誠信書房）

Gjerde, P.F. 1986 The interpersonal structure of family interaction settings: Parent-adolescent relations in dyads and triads. *Developmental Psychology*, **22**, 297-304.

Grotevant, H.D. 1998 Adolescent development in family contexts. In W. Damon (Series Editor) & N. Eisenberg (Volume Editor), Handbook of Child Psychology; Vol. 3: Social, Emotional, and Personality Development. (5th Ed.) New York: Wiley. Pp.1097-1149.

Grotevant, H.D., & Cooper, C.R. 1985 Patterns of interaction in family relationships and the development of identity exploration in adolescence, *Child Development*, **56**, 415-428.

Grotevant, H.D., & Cooper, C.R. 1986 Individuation in family relationships: A perspective on individual differences in the development of identity and role-taking skill in adolescence, *Human Development*, **29**, 82-100.

Grotevant, H.D., & Cooper, C.R. 1998 Individuality and connectedness in adolescent development: Review and prospects for research on identity, relationships, and context. In E.Skoe & A.von der Lippe (Eds.), Personality development in adolescence: A cross national and life span perspective. Routledge & Kegan Paul, London. Pp.3-37.

Hill, J.P. 1980 The family. In M.Johnson (Ed.), *Toward adolescence: The middle school years. The seventy-ninth yearbook of the national society for the study of education.* Chicago: University of Chicago Press, Pp.32-55.

Hill, J.P. 1986 Attachment and autonomy during adolescence. In G.Whitehurst (Ed.), *Annals of Child Development*, Vol.3. Pp.145-189.

平石賢二　1990 青年期における自己意識の構造－自己確立感・自己拡散感からみた心理学的健康－ 教育心理学研究, **38**, 320-329.

平石賢二　1993 青年期における自己意識の発達に関する研究（Ⅱ）－重要な他者からの評価との関連－ 名古屋大学教育学部紀要－教育心理学科, **40**, 99-125.

平石賢二　1995 青年期の異世代関係－相互性の視点から 落合良行・楠見孝編 講座生涯発達心理学第4巻 自己への問い直し－青年期 金子書房 Pp.125-154.

平石賢二　1998 家族談話の分析マニュアル（日本語簡易版 Ver.1）未公刊

平石賢二　1999 青年期後期の親子間コミュニケーションの類型に関する研究 三重大学教育学部紀要（教育科学）, **50**, 191-204.

平石賢二　2000 青年期後期の親子間コミュニケーションと対人意識, アイデンティティとの関連 家族心理学研究, **14**, 41-59.

平石賢二・久世敏雄・大野久・長峰伸治　1999 青年期後期の親子間コミュニケーションの構造に関する研究－個性化モデルの視点から－ 青年心理学研究, **11**, 19-36.

Hoffman, J. 1984 Psychological separation of late adolescents from their parents, *Journal of Counseling Psychology*, **31**, 170-178.

Hollingworth, L.S. 1928 *The psychology of the adolescent*. Ney York: D.Appleton Century Company.

Johnson, B.M., Shulman, S.,& Collins, W.A. 1991 Systemic patterns of parenting as reported by adolescents: Developmental differences and implications for psychosocial outcomes. *Journal of Adolescent Research*, **6**, 235-252.

亀口憲治　1992 家族システムの心理学－＜境界膜＞の視点から家族を理解する 北大路書房

亀口憲治　1997 現代家族への臨床的接近 ミネルヴァ書房

加藤 厚　1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, **31**, 20-30.

Kenny, M.E. 1987 The extent and function of parental attachment among first-year college students. *Journal of Youth and Adolescence*, **16**, 17-28.

Kobak, R.R., & Sceery, A. 1988 Attachment in late adolescence: Working models,affect regulation, and representations of self and others. *Child Development,* **59**, 135-146.

久世敏雄・平石賢二　1992 青年期の親子関係研究の展望　名古屋大学教育学部紀要－教育心理学科，**39**, 77-88.

LeCroy, C.W. 1988 Parent-adolescent intimacy: Impact on adolescent functioning. *Adolescence,* **23**, 137-147.

Lerner, R.M. 1991 Changing organism-context relations as the basic process of development: A developmental-contextual perspective. *Developmental Psychology,* **27**, 27-32.

Marcia, J.E. 1966 Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology,* **3**, 551-558.

Minuchin, S. 1974 *Families and family therapy.* Cambridge, MA: Harvard University Press.

西平直喜　1990 成人になること－生育史心理学から 東京大学出版会

落合良行　1995 心理的離乳への5段階過程仮説　筑波大学心理学研究，**17**, 51-59.

落合良行・佐藤有耕　1996 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析　教育心理学研究，**44**, 11-22.

Olson, D.H., Sprenkle, D.H., & Russell, C.S. 1979 Circumplex model of marital and family systems: I. Cohesion and adaptability dimensions, family types, and clinical applications. *Family Process,* **18**, 3-29.

Pipp, S., Shaver, P., Jennings, S., Lamborn, S., & Fischer, K.W. 1985 Adolescents' theories about the development of their relationship with parents. *Journal of Personality and Social Psychology,* **48**, 991-1001.

Prager, K.J. 1995 *The psychology of intimacy.* New York: Guilford Press.

Rice, K.G., Cole, D.A., & Lapsley,K. 1990 Separation-individuation, family cohesion, and adjustment to college: Measurement validation and test of a theoretical model. *Journal of Counseling Psychology,* **37**, 195-202.

佐藤悦子 1986 家族内コミュニケーション 勁草書房

Turner, R.H. 1970 *Conflict and harmony in family interaction.* New York: John Wiley & Sons.

White, K.M., Speisman, J.C., & Costos, D. 1983 Young adults and their parents: Individuation to mutuality. In H.D. Grotevant & C.R. Cooper (Eds.), *Adolescent development in the family.* San Francisco: Jossey-Bass Inc, Publishers. Pp.61-76.

付　記

本研究は久世敏雄（愛知学院大学文学部），大野久（立教大学文学部），長峰伸治（名古屋大学教育学部）との共同研究の一部を再分析したものであり，マツダ財団第8回研究助成（青少年健全育成関係）を部分的に受けて行われている。

（2000年9月16日　受稿）

資　　料

ABSTRACT

A case study on types of parents-child communication in late adolescence.

Kenji HIRAISHI

The purpose of this article is to examine the relations among parents-adolescent communication style, interpersonal consciousness, and identity. And then this article reexamine the model of individuation proposed by Grotevant & Cooper (1985, 1986) from a viewpoint of typology of family system. Thirty Japanese families (including undergraduate student and their both parents) participated in a Family Interaction Task used to measure family individuation. In this task subjects were asked to make plans together for one week vacation. The first 300 utterances of each family were coded in terms of 14 indices of individuation. In addition to this task, adolescent subjects were asked to complete two kinds of questionnaires to assess interpersonal consciousness and identity status two times at regular intervals.

The data were submitted to two steps principal component analysis and hierarchy cluster analysis. As a result, 'family separateness', 'father's initiative', and 'adolescent's initiative' were confirmed as the effective variable to differentiate four types of family. In the next step of data analysis, some cases who got the higher scores of personality features and the others cases who got the lower score of them were checked their family communication patterns. However, common features of family communication patten among them couldn't be found except for the slight tendency of high family separateness of lower scorers.

Key words: individuation, parents-child communication, late adolescence, interpersonal consciousnes, identity

Appendix 1　各コミュニケーション機能の主成分分析結果（バリマックス回転後の成分負荷行列）（平石・久世・大野・長峰〔1999〕より引用）

コミュニケーション機能	成分 1 渗透性	2 自己表明	3 分離	共通性
情報／確証のリクエスト	.91	−.07	.13	.84
受けとめ	.82	−.14	−.08	.69
他者の考えに対する同意／受け入れ／採り入れ	.52	.33	−.25	.44
情報／確証のリクエストへの回答	−.39	.75	−.20	.75
行動や場所の間接的な提案	.05	.68	.30	.56
関連したコメント	.09	.59	.03	.36
行動や場所の直接的な提案	−.04	.48	.21	.28
他者の考えに間接的に反対／チャレンジする	−.04	.05	.82	.67
他者の考えに直接的に反対／チャレンジする	−.21	.07	.61	.42
行為のリクエスト	.06	.06	.44	.20
行為のリクエストに応じる	.30	.30	−.15	.20
二乗和	2.05	1.83	1.51	5.39
寄与率	18.66	16.63	13.73	49.02

Appendix 2　青年と両親の渗透性，自己表明，分離得点の主成分分析結果（バリマックス回転後の成分負荷行列）（平石〔1999〕より引用）

変数名	成分 1. 家族分離性	2. 父親主導性	3. 青年主導性	共通性
分離・青年	.83	−.02	.20	.74
分離・母親	.81	−.13	−.01	.68
分離・父親	.73	.03	−.18	.56
渗透性・母親	−.23	−.86	−.29	.87
自己表明・父親	−.41	.75	.15	.75
渗透性・青年	−.04	.74	−.44	.74
渗透性・父親	.04	.08	.85	.73
自己表明・青年	.22	−.40	.60	.56
自己表明・母親	.18	−.13	−.54	.34
二乗和	2.48	1.78	1.72	
寄与率	27.56	19.73	19.07	

Appendix 3　各被験者（家族）の同一性地位判別尺度得点および自己肯定意識尺度の平均値および家族コミュニケーション変数の各得点

各クラスターのケース番号		同一性地位判別尺度		自己肯定意識尺度			家族コミュニケーション変数 二次主成分（家族変数）			一次主成分（個人変数） 滲透性			自己表明			分離		
		現在の自己投入	将来の自己投入の希求	自己閉鎖性・人間不信	自己表明・対人的積極性	被評価意識・対人緊張	家族分離性	父親主導性	青年主導性	父親	母親	青年	父親	母親	青年	父親	母親	青年
男子																		
A	M 1	20.50	19.00	14.50	29.50	11.50	− .29	− .39	.66	.45	.49	− .79	.85	− .41	.42	.58	.48	−1.34
	M 2	13.50	14.50	16.50	25.50	17.00	− .51	− .24	.42	− .48	− .41	.24	− .45	− .52	.92	− .71	− .13	− .86
	M 3	21.50	18.50	10.00	27.50	25.50	−1.03	− .98	.08	− .36	.98	.48	− .92	− .38	.94	− .65	−1.07	−1.12
	M 4	18.00	18.00	14.00	27.50	19.50	− .95	− .61	− .31	.54	.77	−1.45	.73	1.46	−1.71	− .70	− .56	− .70
	M 5	20.00	19.00	17.00	24.00	21.50	− .96	− .05	− .29	−1.00	.80	.21	1.19	−1.01	− .71	− .91	.59	− .85
	M 6	21.00	21.00	15.00	30.50	18.50	.40	−1.62	−1.01	−1.47	1.63	.47	−2.09	.45	1.05	.00	− .33	.74
	M 7	19.50	17.50	21.00	28.00	18.00	− .12	−1.37	− .62	− .76	1.86	− .88	− .48	− .73	− .20	1.30	.50	−1.40
	M 8	22.50	18.00	18.00	25.00	28.00	− .26	−2.37	.23	−1.29	1.97	−1.18	−1.17	− .14	2.22	−1.02	.67	.24
B	M 9	18.50	17.50	19.00	28.50	18.00	−1.61	.39	− .08	− .40	− .15	.16	.87	− .88	−1.44	−1.15	− .87	−1.53
	M10	20.00	18.50	16.00	26.50	24.50	− .77	1.81	.08	− .99	−1.27	2.12	2.00	−1.42	− .30	− .99	− .12	− .62
C	M11	14.00	15.50	24.50	25.50	30.00	.98	− .37	−1.11	− .96	.73	.36	− .23	.94	− .60	− .07	1.96	.88
	M12	19.00	18.00	21.50	31.00	14.00	1.41	.58	−1.06	−1.60	− .84	1.19	− .51	− .10	− .21	.63	1.95	.46
	M13	16.00	16.00	19.50	24.00	21.00	.48	.80	−1.50	−1.59	− .26	1.32	.15	− .65	−1.83	.33	1.58	− .38
D	M14	19.00	19.00	18.00	29.00	16.00	.97	− .39	1.25	.35	− .75	− .01	−1.40	− .46	1.51	− .65	1.36	1.08
	M15	15.00	15.00	24.50	18.00	24.00	1.66	− .35	1.86	.96	− .78	−1.95	− .15	− .89	.59	.14	3.20	1.31
女子																		
A	F 1	10.00	15.00	32.00	21.50	24.00	− .26	− .04	.68	.42	.49	− .21	1.20	− .33	.06	− .40	.58	− .13
	F 2	18.00	19.50	25.50	24.00	24.50	−1.00	− .59	.29	− .66	.69	− .19	− .22	−1.51	− .13	− .75	− .67	− .61
	F 3	20.00	19.50	16.00	24.00	21.00	− .98	−1.56	− .72	−1.27	1.89	− .10	−1.15	− .42	− .10	−1.09	− .29	− .49
B	F 4	14.00	17.50	20.00	25.50	25.00	− .96	.81	.05	− .54	− .06	.75	1.99	− .56	− .54	− .77	− .91	− .29
	F 5	17.50	20.00	17.50	29.00	12.00	−1.20	.76	− .25	− .51	− .07	1.62	2.07	1.20	.59	−1.47	−1.48	− .31
	F 6	20.00	20.00	14.00	27.50	25.00	− .29	.81	.32	− .23	− .90	.96	.54	− .64	.15	− .05	− .98	− .35
	F 7	16.50	15.00	17.50	26.50	23.50	− .45	.57	− .03	− .22	− .61	.78	.52	.11	− .04	− .07	−1.26	− .53
	F 8	16.50	20.00	10.50	30.00	13.50	− .47	1.09	− .44	.03	−1.08	1.73	.26	.72	− .61	− .33	−1.30	− .71
	F 9	14.00	20.00	16.00	29.00	21.50	− .86	1.58	1.81	.31	−1.06	1.03	2.52	−2.46	.45	− .81	−1.15	.22
C	F10	10.50	15.50	19.50	21.50	23.50	.90	− .04	−1.32	−1.12	.41	.77	− .28	1.14	− .41	.75	− .40	1.13
	F11	16.00	15.50	17.00	22.00	20.00	.74	.12	− .51	−1.03	− .50	.99	− .64	.26	.43	− .20	1.05	.40
	F12	19.00	20.50	9.00	32.00	22.50	2.20	.40	− .73	−1.05	− .10	.89	− .15	− .13	− .35	.80	3.09	1.83
	F13	15.50	17.00	17.00	18.00	21.50	.93	1.84	−1.04	− .74	−1.03	2.65	1.45	.55	− .43	.89	.64	.14
D	F14	13.00	14.50	19.00	18.50	28.50	.97	− .52	.37	− .30	.14	− .49	− .70	− .56	.49	.49	.99	.82
	F15	12.50	17.50	23.00	22.50	27.50	1.35	− .08	2.94	2.27	− .65	− .61	− .08	− .87	2.30	.42	.58	1.78